

第 5 回京都文化芸術都市創生審議会 摘録

日時：平成 22 年 2 月 1 日（月） 午後 2 時～4 時

場所：京都ロイヤルホテル&スパ 2 階 翠峰の間

出席委員（敬称略）：

麻生圭子委員，池坊由紀委員，梶田真章委員，小林千洋委員，杉山準委員，
鈴木千鶴子委員，鈴木町子委員，千宗室委員，西島安則委員，村井康彦委員，
山本容子委員，細見吉郎委員

事務局：

山岸吉和文化市民局長，平竹耕三文化芸術都市推進室長，
宇野文化芸術都市推進室担当部長，奥文化芸術都市推進室担当部長，
内山修文化芸術都市推進室担当部長，寺井正文化芸術都市推進室担当部長ほか

1 開会

2 委員紹介

3 議事

(1) 京都文化芸術都市創生計画（以下，創生計画）の取組状況について

資料 2, 3 に基づいて事務局から説明

- ・創生計画の取組状況（全体概要）
 - ・京都会館再整備等について
 - ・第 26 回国民文化祭・京都 2011 について
 - ・京都芸術センターについて
 - ・文化財について

(2) 意見交換

別紙のとおり

4 閉会

(別紙) 意見交換摘録

<議長>

最初に京都市の計画の全体像を御説明いただき、次いで四つの主な取組を御紹介いただいた。全体の構造を頭の中に整理していただけたらどうか。実に様々な取組をされていて、正直、関係性が分からないくらいだったかと思う。京都ならではだと思ふ。

説明の内容と全く無関係というわけにもいかないかも知れないが、できるだけ、これからの京都市の文化芸術都市創生の事業についての御意見を伺いたい。また、他の委員の御意見に対して、それぞれの御意見をお示しいただいてもよいと思う。

<委員>

私は、先程御紹介のあった京都芸術センターのロゴタイプの審査員としても携わったが、10年前にセンターを立ち上げられた際にもアイデアを出すなど、長く関わってきた。

10年という年月をきちっと支えてこられて、今、これほど成果が見えてきたプロジェクトはないのではないかと思う。非常に地道なものだが、彼らが大事にしたのは明倫地区であり、その小学校(大変素晴らしい建築物だが)であった。様々な分野、美術だけでなく、音楽、演劇、お茶会、そういうものを非常にきめ細かくプログラムし、小学校の建物を利用しながら、使い続けてきている。10年経ってある大きな力になってきているのではないかと思う。もちろんこれからも11年、12年とずっとお考えになる。彼らのした素晴らしいことというのは、こういうチラシをたくさん作って、もちろんネットという形でもされているが、全国発信をしていることだ。こういう広報紙を編集して、自分たちが今何をやっているのかを伝えようという気持ちが、内部に強くある。ボランティアに支えられている部分もあると思うが、やはり、しっかりした事務局の意識が一つのものを育てるという非常によい例だと思う。大切に見ていきたい。先程の説明では、こういう事業をしました、という報告でしかなかったが、もし、ここを通して京都のある側面がすごくユニークに全国に伝わるのならば、その辺りをもっと平たく話して協力体制にもっていききたい、そういう気持ちでいる。人も、お金もかかることだが、海外からも含め、たくさんの方が来たときに、あのきれいな小学校が文化交流の拠点になっているというのは、京都らしい、非常に地味なのだけれども味のある、濃い感じがして、この働きには特に注目して見ていきたいと思う。

<議長>

芸術センターの創成期から、ずっと関わってこられて、何か感慨でもあればお聞かせください。

<委員>

私は遠くから手をかざして眺めていただけで、現場の皆さん方が本当に一生懸命やってくられた。事務局長をはじめとするスタッフたちの忍耐があつてこそその芸術センターであろうと、私は思う。私を含む外部の人間は、沢山の想いをそれぞれの自分の立場でスタッフに言う。それを受け入れてくれた、そういう素晴らしい人材に感謝したい。そういう感謝を、今度の記念式典の中に入れてもよいのではないかと思う。表も裏も、皆のやる気が報われてこそだ。

<議長>

これを聞いたらスタッフも感激すると思う。

今、忍耐という風に仰られたが、スタッフの方たちは本当に熱心で、私も外から眺めているようなものだが、ほとんど感心させられる。ある意味では時間を無視して働いている。あの熱心さあつてこそセンターだと思う。

<委員>

昨年、京都に着任して以来、大変丁寧に色々な情報を送っていただいている。情報の内容もバラエティに富んでおり、これを一つ見ていけば、京都の発信のいきごみというのは大変よく見える。京都創生座のような東京での企画も含め、京都には多彩な伝統文化があるが、あ、見たいな、と思わせる作り方をされている。裏にはすごいプロデューサーがくっついてやっているのかなと思っていたのだが、職員とスタッフがやっているということを伺い、京都の人たちはプロデューサーとして優れているのだなと改めて感じた。

<委員>

今日も紹介があつたが、いつも祇園祭に特化され過ぎているという感じがする。祇園さんはもう放っておいても人が来るので、あまり知られていない祭を市として取り上げ、アピールする、そういった取組の方が今後は求められるのではないか。それぞれの地域にはそれぞれの素晴らしい祭があり、それこそ地味に守られてきた。そういう取組を、世界に向けて紹介していただくとよいと思う。

それから、以前から申し上げているが、子どもや芸術系の大学生について、お金を使わずに、もっと身近に芸術に親しめるような機会を提供していただくということが、まだまだ必要なのではないかという気がする。市としてどういう風にお考えになっているのか分からないが、是非、青少年に向けて、芸術に親しむ取組をしていただければと思う。

それから、これは文化芸術に当てはまるか分からないが、言葉というものにもう少

し焦点を当てられないかと思う。観光ということを考えても、親子で楽しく遊びながら言葉を学べるような施設など、京都ならではのことができるのではないかと思う。

<議長>

祇園祭については確かに紹介が随分と出てきたが、世界遺産への登録と関係して意図的にされたのであって、毎年、出てくるわけではないだろうと思う。それはそれとして評価してもよいのではないか。

それから、子どもについてのことだが、事務局から何かありますか。

<事務局>

芸術センターで取り組んでいる内容だが、夏休み、冬休みに、能楽、邦楽、詩、俳句等の体験教室を開催している。能楽では大江能楽堂をお借りし、また、邦楽では、京都会館での市民邦楽会があるので、最後に舞台上がるということで取り組んでいる。

また、2年前から小学校等に芸術家を派遣するという取り組みをしている。こちらは、市の特別奨励者、新人賞受賞者、あるいは京都市交響楽団の団員を含め、御協力いただいております。まだまだ必要はあるかと思うが、事業を行っている。

<議長>

文芸についてはどういう取組を？作文教室などを行っているのでは。

<事務局>

作文教室も行っており、最後に文集としてまとめている。俳句等は全国規模のコンテスト等に応募をするなどし、京都の小学生たちの受賞にもつながっている。

<委員>

私は、教育の分野も担当している。30年程前は、京都の教育は受けさせたくない、私学に行くか、あるいは他府県に行くかという状況だった。それが、今は京都市が教育先進都市だと言われているという。それは多分に御所南小学校や、堀川の奇跡、西京中学校など、学力を中心としたことだという印象を持ってきた。ところが、自分が担当になってみると、学力ということもあるが、感性の面でも先進的だということが分かった。たとえば、京都市では劇団四季の公演に行かせるシステムを作っている。それから、コンサートホールにも必ず行かせる。もちろん子どもは無料で。そういう感性の面も手がけている。それからもう一つ、特別支援学校やフリースクール、その辺りのシステムがすごくよくできているということを知り非常に驚いた。その意味で、京都の教育は、今、御提案いただいたようなこともどんどん吸収してやっていけると

思う。今、私には孫がいるが、もう市立の学校に入れようと、そんな気分である。

<委員>

私は今、公共政策を勉強しており、その視点から申し上げる。

国の政権交代があり、昨年 11 月頃、事業仕分けが大騒ぎになった。あの過程を見て、NPM (New Public Management) の流れを受けて、やはり公共の政策のあり方、お金の使い道の見方がかなり変わってきたと感じた。国をはじめ、地方もお金がないという状況の中、文化に関するお金の確保の仕方というのは非常に重要なことだ。先日の事業仕分けを見ていても、文化ではなく学術振興の方だが、こんなものは生活支援じゃないかという趣旨の批判が出ていた。私は、生活支援でも、その方がきちんと研究をして生きていくためなら、必要ならばやるべきだと思うのだが、それを見て喝采した市民もきつといらっしやったと思う。文化というのはもともと、100%そうではないにしても、プライベートな領域というのが大きい。プライベートな部分でやってきたことを、公共の福祉として、市なり国なりがやる時点でずれが生じているのかも知れない。しかし、やはり公共がやる文化政策というのは、今足りないという意味ではないが、もっと理解を得るための努力をしていくということが必要だ。

一方で、子どもたちが文化のよさを理解していくということは、やはり今の大人たちに分かってもらうということ以上に必要なことだ。子ども自身の人生が豊かになるというだけではなくて、将来、その子たちが大人になった時に、自分の払っている税金の使い道としての文化を理解してくれる、その意味においても必要なことなのではないかと思う。

もちろん、文化というのは大変幅の広いもので、言葉も入るだろうし、自分のすぐ足元から始められるものである一方で、上から降りてくるというような印象を持たれることもある。だからこそ事業仕分けが喝采されるのだろう。文化は何も日常生活からかけ離れたものではないということを理解してもらえよう、京都市は様々な取組をされていると思う。京都は、文化が非常に日常生活に近い、そのような土地だと思っている。地域それぞれのお祭りがあり、私の住んでいる地域でも、神社に大変古い形の神饌をお供えする。そういうことも小学生の頃から説明を聞き、伝統を守って暮らしてきている。

<委員>

京都というのは今でもハレとケの区別が残っている、と他所から来て思う。一番最初にこの審議会に出席させていただいたとき、文化芸術というのは、ハレの文化芸術もあるが、暮らしも文化であるから、その辺りにも光を当ててほしいということを申し上げた。資料を拝見すると、暮らしという項目があり、嬉しく思っている。先程の言葉の問題についても、短歌や俳句、小説、そういった芸術がしばしば取り上げられ

るが、京都人の話している京言葉も、他所から来ると、1,200年の京都の人が生きてきた哲学のようなものが見え隠れして、非常に面白いと感じる。最近、京都の方でも、あまり京言葉を使わなくなっているようで、友人の子どもたちでも「マジ〜」というような言葉を使ったりする。段々、京都でも、他所者があこがれるところの、ほんなりとした柔らかい言葉が姿を消してきているようだ。ネイティブで京言葉を話されているような方たちと膝を突き合わせながら、観光客だけではなく小さい子どもも含めて、京言葉を学ぶような場があってもよいと思う。また、町家などで、今はガスコンロというけれども昔はおくどさん言うたんえ、というように、言葉で暮らしを学ぶような場があってもよいと思う。

それから、京都の暮らしには、お茶やお花の文化が染み込んでいるように思う。やはり家元のお膝元ですから、これは茶の湯から来ているのかな、いけ花から来ているのかな、というようなことがしばしばある。道としてのお茶ではなく、暮らしの中に根付いている、そういう柔らかな、ハレとケでいうケの、日常の中の文化芸術にも注目したいと思う。

<委員>

生活に根ざした文化の重要性が、今の時代だからこそ問われているのではないかと思う。

たとえば、お花をやらない理由を若い方に聞くと、元々お花に興味がないという方もいるが、中には、手を汚したくない、冷たい水に触りたくないという方もいて、手を使う文化が敬遠されているように感じる。手を動かすことが面倒くさいというような、そういう風潮があるのではないかと思う。考えてみると、文化というのは、お花にしてもお茶にしても、あるいは料理や楽器、織物など、頭で考えるだけではなくて、実際に自分が能動的に手を動かすことで生み出されている、育まれている部分が大いなのではないかと思う。京都の子どもたちには、芸術作品とまではいかななくても、手を使って生み出す喜び、あるいは手を動かす過程で感じた想いや時間を大切にする、そういう感性を育んでほしいなと思う。

それから、先程も青少年に向けた取組というお話があった。色々なシンポジウムに行くと、毎回、比較的、年輩の方が多と思う。テーマの設け方にもよると思うが、文化の継続性というのは非常に重要だと思うので、次の世代にどのように伝承していくか、どのようにすれば若い層に興味を持ってもらえるか、ということも考えたい。色々な立場、世代の人たちがフランクに交流できるというのも文化の一つの特性だと思うので、それぞれの世代に向けた取組とともに、色々な立場の人が交わる場を文化によって作り出せればと思う。

また、京都というまちを考えたときに、留学生、外国人というものもこれから大事になってくるのではないかと思う。これまでの京都人になかった新たな視点や価値観を持

ち込むことで、また京都の街が揉まれて膨らんでいくということがあると思う。中には日本で就職する方もおられるが、母国に帰る方が圧倒的に多いと思うので、京都の観光にも影響を与えてくるだろうと思う。是非、留学生、外国人についても、機会を利用して、お互いにプラスになるようにしていただければと思う。

それから、文化ボランティアの制度も、ようやくあちらこちらで高い評価を伺うようになってきたと思う。企画実行する側と、文化ボランティアのサポートがうまく融合してきたかなという気がする。しかし、その半面で、文化ボランティアの仕事の内容というのが、人の誘導などの単純作業に終始しているようだ。本当は、文化に関心を持っておられる方の特性を生かした、もっと有機的な仕事の仕方があるのではないかと、少し勿体ないように感じるときもある。

<委員>

先程、青少年と申し上げたのは、別に京都の子どもではなく、他所から来る子どもに色々見てもらうという視点が大事じゃないかと思っただけのことだ。少しお話もあったが、結局、どうやって京都の人に出会っていただくか、直に人に会って、誰かと出会って、それが印象に残るといえることがもっとあればよいと思う。京都に来る修学旅行生と上手に付き合いたい。たとえば僕がホテルに出張するとか。

<委員>

京都芸術センターというのは、私は仕事の関係でよく知っており、素晴らしいところだと思うが、一般の市民には分かりづらいのではないかという気がする。簡単に言うと、効果が数字で示されにくいからではないかと思う。何人動員したか、幾らお金をかけたか、1人当たりにかかったコストは幾らかなど、それらの指標だけでは価値が測りにくいのではないかと感じる。文化の価値というのは、もっと多様なもので、少し違う指標で測らないと、財政状態の悪化を前にして、軽視されがちな部分がある。文化は、一度なくすと取り戻すのが困難な分野だ。

たとえば、芸術家たちが、京都という街を愛し、京都に住もうという気になる、という漠然としたことを考えるだけでも、無名の人、知らない人、その後どうなるか分からない人たちに予算をかけるかどうかという議論になると思う。幾許かの支援を受けて活動を継続できるような環境さえあれば、もしかするとその人たちは京都に残ってくれるかもしれない。その僅かな支援を惜しむことで、他都市や海外へ優れた人たちが流出してしまう可能性もある。それが文化的に大きな損失になる、そういうようなことも感じる。

文化芸術の分野では、民間にできないことを行政が担っていく必要があると思うが、経済状況がよくないこのような時期にあっては、採算が取れないことをただやるのではなく、もう少し工夫をする必要もあると思う。民間の企業と連携するというのも方

法の一つだ。文化というと高潔なイメージがあるが、もう少し観光産業と連携するとか、生臭いお金のことも意識しなければならない。経済的な活動、収益があった方が逆に分かりやすくなるし、文化の価値を発信するにしても、伝わりやすくなるのではないかと思う。京都芸術センターでもそうだが、文化芸術に興味のない方に如何に説明するか、たとえば、賞を獲ったとか、そこで創られた作品がある商品に転化されて収益をあげたとか、そういうことがあってもいいと感じた。

<委員>

私の家は生粋の京都の家系で、京都の伝統的な文化が失われていくことについて、もどかし思いを持っている。市の方でも色々な細かい取組をなさっているということだが、それらの取組の乗る土台、舞台というものも大事だ。景観や街並みといったものがなくなれば、京都の文化はますます壊れていく。景観を保存しようとする、やはり多少の規制をかけなければならないが、そうすると反発が起こるかも知れない。私の地元の仁和寺では、風致計画として規制がかなり厳しい。近年、歩いていける距離にやっとコンビニエンスストアができ、地元に住む者は気がつかなかったのだが、親戚の子どもが来て、看板が茶色だよ、と言う。コンビニエンスストアは、普通は赤や黄色の色を使うようだが、京都では規制があって、それでダークブラウンにされている。それが珍しいということだ。規制を逆手に取るという言い方が悪いが、規制があって他府県と違うということが、また一つの京都の在り方であるかも知れない。やみくもに古いものもいいというわけではなくて、古いものを大切に残してきた、そのものがまたその時代ごとに色に染まるということだと思う。

<委員>

一つは数で評価できるものとそうでないものがあるということを申し上げたい。特に最近、明治維新の文明開化以来、行き着くところまで来たように思う。天皇が江戸に出て行って、その辺りから京都の中で文明対文化ということが言われるようになった。文明開化が、文化に対して、ほとんど破壊的な影響を与え、列強に伍するというようなところから始まって、戦争もし、最後には敗戦国になって、今度は経済大国になるのだ、と。文化は打撃を受けた。

ただ、そのような中で京都の文化は強くなったとも思う。時間をあまり短く区切らずに見ると、京都の復元力というのは大変強いのではないかと思う。先程も明倫小学校の話があったが、あれを芸術センターにするために、壁紙も、ドイツから建てたときのものをもう一度取り寄せた。同じことが祇園祭の鉾町のことにも言える。まちの構造が変わって、あの長い鉾をどうやって保存するか、それから織物を仕立てる、1本1本糸を抜いたり入れたり。鉾町にも3代、4代、同じ家があって、京都の文化の復元力になっていた。

今の日本では、計画を立てて、あと3年で、あと5年でここまでやろうという風にものを進める。それをまた評価をして、新しいものをクリエイトしようという、幼稚な政策だ。別に10年、100年かけてもよいのではないかと思う。

先程のお花のことで、特定の場所、特定の時を示すのではない、生活の美意識というものがある。四季を通じて美しい、また100年経っても美しい。それをさらに繊細な、洗練した、あるいはダイナミックな大きい造形としてのものにしていく。

あまりに計画をして、分離をして、1個1個を評価していくのではなくて、大きなエネルギーを配置するような格好で、古いものから新しいものを考えたい。時間はかかるが、これまでもそれでよかったのだからと思う。

明倫小学校で、あそこを芸術センターにしようというとき、近所の自治会、町内会の皆さんと相談し、小学校を中心にして楽しい町にしようということをした。10年経って、限界も大分発展した。けれどもまだ50年かかるんじゃないかと思う。たとえば立誠小学校の向かいの、あの一帯には古い料理屋が残っている。たん熊さんが一生懸命やっている。京都の日本料理屋さんがフランスへ行って料理を学んできて、日本のフランス料理をやるという、そういう方の話を聞いてみると、やはり野菜も、輸入するのではなく、向こうでよく使うものを近所に植えて、ということで環境を作るところから始められる。これは20年くらいかかる話だ。

私は、京都は国の財産だと思うので、文明開化の勢いで近代化するのではなく、時間をかけてやっていければと思う。

<委員>

高校の頃、私は軟派の典型のようなものだったが、大学で更生した。大学で何をしたかと言うと、授業の合間に原稿を持ち込んで小説を書いていた。今は見る影もないが、当時は純文学を載せる文芸誌というものが沢山あり、ある雑誌に絞って、実は秘かに応募もしていた。見事に全部落ちたが。書いたものを出せる場所というのが、当時は、同人誌以外だと、中央の文芸誌しかなかった。文学部だったせいもあるが、周囲の者も結構小説を書いたり詩を書いたりしていて、それは憂さ晴らしのようなものだったが、みんな見事に一次で落ちて、仲よくしていた。

文化芸術都市創生計画を見ると、言葉でものを創るということがあまり書かれていない。絵画など、インパクトのあることが中心的だと思う。紫式部文学賞というのが宇治にある。それから、坊ちゃん文学賞が松山にある。京都も一つ文学賞を作ってもいいんじゃないか。それも安易に文学賞を作るのではなくて、大勢の人が文学に親しむ場としての賞、そういうものを作る。先程も仰ったが、京言葉で書かれたエッセイや小説、京都を舞台にした純文学、エンターテインメント、SF。それで平安文学賞のようなものを作って、小学生、中学生、高校生、大学生、社会人も入れてもよいかも知れない。それこそ少年の部や老人の部があってもよいかも知れない。プロになるた

めの場合ではなく、自分の書いたものをいろいろな場所で批評し合ってもらえるようなことが、核家族化が進んでいる今、何か余裕を与えるのではないかと思う。言葉遊びというのが、短歌であるとか俳句であるとか非常に専門的な方へ偏っている、偏っているという語弊があるが、そちらの方へ目がいく。いわゆる作文的なものがない。そういう一つずつのステップを経て、子どもは言葉に親しみ、口から出る言葉の軽さ、書かれた言葉の重さのようなものを学ぶのではないかと思う。たとえ賞金を出さなかったとしても、京都市というものが頭にあって、平安文学賞と先程言ってしまったが、そういうものがあれば色々な世代に喜んでいただけるような大きな方法になるのではないかと思った。

<委員>

さっきは祇園さんのことを言ったが、神社やお寺が世界遺産に成り下がる、ということはずっと思っている。評価されてこそ、というようなことになっている、そのことが、それが当たり前になっているということ自体が、京都の将来を暗くしていると思う。

<委員>

文学賞の話は面白かった。金沢が泉鏡花賞というものを出しているが、受賞者は必ず金沢へ行かなければならない。出版社であろうと編集者であろうと、とにかく東京では受け取れなくて、金沢まで足を運ばなければ貰えない。そういう地方と文学賞というよい関係が確かに全国にあるので、そこは何か考えてもいいのかなと思った。

私は先に、明倫小学校について非常に渋い仕事を10年されてきたスタッフの話をしたが、それに関連し、子どもを文化の場に連れてくる、あるいは次世代を担う子どもたちに具体的にどういうことをすればいいのかという具体策、そのイメージが皆ばらついていてのではないかと思い、一言発言する。

私は、一昨日、広島のおくやま美術館というところで、子どもたちを集めてワークショップをやった。子どもたちを集めて何かを伝えるというときの人数、これは大体20人でよい。人を集めるというと、1万人、10万人という話になりやすい。祇園祭ならそういうこともあるだろうが、子どもに何かを教えるというのはもっと渋いことだ。20人の子どもがバラバラにやってきて、ワークショップをやる。その時に働いてくれるボランティアも必要なのだが、たったの20人に4時間かけてものを教える。先日のワークショップでは、子どもたちには感激してもらえ、スタッフとともに、効果があった、と胸を撫でおろした。そういう渋いことを積み上げていかないと子どもに文化を伝えることなどできない。お茶にしても、言葉にしても、美術にしても、音楽にしても、生活のこと、しつけのこと、それをマスとしては20人呼んで、たとえば明倫のようなところでやる。それで伝われば、これはもう成果ありと見なければなら

い。マスの在り方のイメージというものを変えなければならない。教育もそうだが、渋くて伝わりにくいものを、10年、100年かけてやらなければならない。京都はそういうことができると思う。京都には、お寺も含めて、色々な場がある。明倫小学校の会議室は、行ったことがないという方も沢山おられると思うが、ウィリアム・モリスの、当時の壁紙で覆われている。そのモリスの壁紙を見ただけでも、こんなものが街中にあったのかと、何も美術館にわざわざ行かなくても、その美意識に感動する。大きなことを考えないでと言うとおかしいのだが、5人、10人を10年かけて育てる、あるいは10万回かけて10万人を育てるといふ、そういうゲリラ的なプロジェクトの在り方みたいなのも京都ならできると思う。これができないのが東京だ。東京は、やはり1回で経済的に効果を挙げなければいけない。お金も儲けなければいけない。だから1回に1万人、2万人連れてくるようなものを選ぼうとする。そうすると元手がかかり、人が来たかどうかにも気にしなければならない。どっちが先だったのだという話になる。文化遺産も沢山あって、人も沢山いて、おまけに芸術系の学生がこんなにいる街はないのだから、それを生かさなければならない。芸術系の学生たちが、社会に出て就職して自分たちの専門を生かせない世の中であるならば、そういう人たちにボランティアスタッフとして働いていただくことも考えられる。芸術系の学生たちにお手伝いしてもらい、あるいはカリキュラムに入れて20人の子どもたちと対峙させるとか、そういう具体策を考えたい。お金がなくても、人材があつて、文化的施設があつて、そういう京都の特性を大事にしたい。私は先程、明倫の芸術センターを褒めたが、意志を持った大人たちが、ちゃんと10年間支えてきたという事実、この点こそがすごいのだ。そのことを褒めてあげたいと思うので、そんなことを生かせる何かを作っていくべきではないかと思う。

文学賞もいいアイデアだと思う。

<委員>

世界遺産のようなものは、道に落ちていたら拾うくらいのつもりでよいと思う。

<委員>

マンガミュージアムでは、養老孟司先生が館長をされていて、若者も一般市民も集まっている。マンガと言うと、非難する方もいるが、マンガは大変な文化だ。養老先生のお話を聞いていて、非常に幅が広くて深いものだと思う。京都では元々精華大学にマンガ学科があつて、非常に早かった。マンガだと人が集まる。何故マンガなのかと言う人もいるが、両方やらなければならない。

<委員>

マンガミュージアムについて、皆さん御存知だろうか。特定の日にはコスプレイヤー

が沢山集まっている。非常に面白い。私自身はあまりマンガを読まないが、それでもそのマンガの世界に啓発されて、あれだけ色々な格好を自分たちで調達し、知らない者同士が会って、ハンドルネームでかも知れないが友達を作っている。これはやはり一つの可能性であろうと思う。何故、私がそれを知っているかというと、舞妓さんに一人そういう子がいるからだ。その子が、イベントの日はほとんど行っていると聞いた。置屋さんの部屋に着物の横に、コスプレセットが置いてある。これも今風だ。目くじらを立てなければいけないのかも知れないが、しかし、それも一つの当世風かな、と。目に映る富士山がいつまでも三十六景の版画のものと同じであってはおかしいように、マンガミュージアムをめぐる風景も、新しくできたものをめぐる風景も、日に日に変わっていくのだろうと思う。それを、最初に手掛けた人間が、ちょっと趣旨と違うのではないかと言うようになってしまうと、歩みは止まると思う。長い目で見守るといふ、勇気と度胸と根気がないと、こういう事業はやっていけないと思う。

<委員>

終わりに、お礼も兼ねて御挨拶させていただきたい。

その前に、先週、パリのシンポジウムへ行って、そこで感じたことを御報告したいと思う。今、京都市は都市経営戦略の中核として「和の文化」を基軸の一つにしている。もう一つは、COP3京都議定書誕生の地ということで、「環境」ということを軸にして、都市経営をしている。パリへは着物で行った。今回のシンポジウムのテーマは環境であったが、思わぬ効果というか、着物を着ていると質問が全部私に集中した。もう一つ、シンポジウム後の会で話をすると、色々な人たちが、着物を着て環境と言うと他の人が言うよりもより本気度を感じると、こう言ってくださった。これは私も計算外のことだった。この延長で考えると、やはり「和の文化」で色々なことをすると、ものづくりも本物づくりということでいろんな信頼を得られる。東京は洋の文化なので、それはそれでいいとして、我々は京都で文化的な資源にも恵まれているのだから、「和の文化」で、一つこのグローバル化の中で都市経営をしていこうと感じた。たとえば、京都市は京響というオーケストラを持っているが、今度海外で演奏しようという案がある。楽団の者に、着物を着て演奏してくれないかと頼んでいるところだ。いきなりは全員がうんとは言ってくれなかったが。

本日は皆様お忙しい中、これだけの委員の方、お集まりいただき、色々な意見を出していただき、どうもありがとうございました。これだけの御審議をいただけるということも、これも京都力だと私は思っている。市民委員の方からも、非常に厳しい、あるいは的を突いた貴重な御意見をいただいた。こういう御意見を、我々京都市政の中で生かしていかなければならないと思っている。

計画に記載している事業では、初年度からずっと継続しているものもあるが、今年3年目になってからのものもある。来年度は、国民文化祭、京都会館50周年、先程話

題になっていた京都芸術センターの 10 周年など、盛り沢山だ。皆さんの力をお借りして、一つでも褒めてもらえるような形にしたいと思っている。とは言っても、京都市だけでできるわけではなく、芸術家の先生方や国や府、それから京都には芸術系の 6 大学があるが、こういった方々のお力を借りて、本気になってやっっていこうと思っている。どうぞよろしくお願い致します。

先程会長からもお話があったとおり、委員の皆様、今年度末で任期満了ということだが、今後も色々なことで御相談に参ると思う。どうぞよろしくお願い致します。本日はどうもありがとうございました。

<議長>

本日はどうもありがとうございました。

以上